

馬場久幸著

『日韓交流と高麗版大藏經』

A 5判 vi + 一二一 + 八八頁 八五〇〇円+税
法藏館 一〇六年一月刊

蓑輪頭量

本書は、朝鮮半島の高麗の時代に刊行された高麗版大藏經の受容に関する研究である。大藏經として実際にどのようなもののが存在したのかについては、かつて常盤大定の『大藏經概觀』及び小野玄妙の『仏書解説大辭典』の解説が、全体をまとめた代表的なものであった。それ以外には野沢佳美『印刷漢文大藏經の歴史——中国・高麗篇』（シリーズ アタラクシア3、立正大学図書館編）などが知られる程度であろうか。一方、個別の大藏經の調査に基づく報告書は、実は数多く出版されている。ところが、それらを踏まえて大藏經の受容に焦点を当てた研究は、今まで存在していなかつたと思う。しかも日本で成立する大藏經にも大きな影響を与えた、高麗藏の受容に関する研究である点で、本書は貴重な成果である。

高麗大藏經は、巻数で表せば六千巻を超えるから、調査報告書を用いたとしても、その作業には膨大な手間が掛かることが容易に想像される。本書の成果の中には、現在、大藏經研究の第一人者である松永知海先生の指導のもと、自らも調査に参加

したもののが数多く含まれており、いずれにしても本書が大変な時間の掛かった労作であることは間違いない。

仏典の散逸を防ぐため、また普及のため、經典の集成としての大藏經が制作されるようになった時期は意外に早い。中國南北朝の時代から「大藏經」または「切經」の用語が知られている。よって、その言葉は、經典の翻訳が数多く為された南北朝期から既に存在していたと考えられるが、その切經を後代に残そうとして作成したものとして、中國唐代では房山の石経が有名である。やがては伝来した仏典を手写して、一つの叢書として纏めるようになつた。その時に大事な役割を果たしたもののが經論の目録であった。日本の場合、それらの叢書は、例えば石山寺 切經、梵釈寺 切經など、切經の名称で知られることが多い。しかし中世の時代以降は、大藏經の方が市民権を得ているような気がする。

さて、版本を雕造して印刷する大藏經が登場したのは宋代であった。最初の版本大藏經は、その開版の年時である開宝五年（九七一）の年号を取つて開宝藏、またはその製作の地の名称を取つて蜀版と呼ばれる。宋代以降、何度も大藏經の版本が作られ、また刊行されることになつた。それら個別の成立経緯や実際に残るセットごとの研究は、少しずつ進んでいる。江戸時代の鉄眼道光の尽力によつて作成された黄檗版（別名鐵眼版）大藏經も、いくつも所蔵寺院ごとの調査が進み、報告書が出されている。

さて、本書は、実際の寺院に所蔵される高麗版大藏經の報告書や調査をもとに、高麗版の受容に関する研究を、書に纏めています。

ものである。全体の構成は序章から始まり四章までの五編の論文と付録として一つの目録からなる。まずはその全体を概観し、研究結果について纏めた部分である。現在の高麗藏は開宝藏と契丹藏そして高麗藏の初雕版を校勘していることから信頼される大藏經とされるようになつたが、それは江戸時代に黄檗版が開版された際に、法然院の忍激が高麗版をもとに對校をしたことに基づき言われるようになつたことを明らかにする。

序章は「研究の目的と研究成果の整理」と題する章で、大藏經の歴史を概観するとともに高麗版大藏經の成立や、これまでの研究結果について纏めた部分である。現在の高麗藏は開宝藏と契丹藏そして高麗藏の初雕版を校勘していることから信頼される大藏經とされるようになつたが、それは江戸時代に黄檗版が開版された際に、法然院の忍激が高麗版をもとに對校をしたことに基づき言われるようになつたことを明らかにする。また、日本における高麗藏の研究は、海印寺の版本の存在が知られるようになつた一十世紀初頭には盛んであったが、戦後はあまり顧みられていない。一方、韓国では継続して研究が続けられており、その蓄積が日本よりも多いことを指摘する。また、高麗藏の印刷は近代にも継続してなされていたことに注意しなければならない。

日本と朝鮮との外交関係の中で高麗藏を考察する研究が進められたのが九六〇年代、そして版本の研究や印刷の目的は仏力による怨敵退散を祈願することにあつたとする定説ができるが、九七〇年代とする。東国大学校から影印版が出された一九七六年が、一つの研究の画期となつた時点でもあり、高麗藏そのものの詳細な研究がだされるようになつた。一九八〇年代からは書誌学、美術史、仏教文化という側面からの研究が多く出るようになつた。そして一九九〇年代以降になると、非常に多くの研究が韓国で出されるに至つた。それは雕造への参

『宗教研究』91卷1輯 (2017年)

も存在し、日本には五十蔵以上が伝来したことになるという。現在、泉涌寺、四天王寺、立正大学に所蔵されるものは一十世紀以降の印刷であるといふ。それらの中で同 経典、同 箇所で、文字の欠落、補充の情報を取りれるものがあり、印刷の先後関係を明らかにすることのできるものが幾つかある。指標になつた典籍は「経律異相」であった。

第一章は「室町時代の高麗版大藏經の受容と活用」であり、将来された高麗版がどのように受容されたのかを中心的に言及される。それは禪寺において切経の転読による祈禱が行われていたことであるといふ。特に室町將軍の誕生日に大藏經の転読が行われた。いわゆる誕生日祈禱の為に用いられた例が見られる。また、将来された大藏經に基づいて書写された大藏經もある。思溪藏は、増上寺、喜多院などに所蔵されたり、北野社 切経はそのようなものであり、「大般若經」の底本が高麗藏であることが確認できる。その他は宋版の思溪藏であるといふ。なお、思溪藏は、増上寺、喜多院などに所蔵されたり、その伝來の経緯がわかるものもある。

次に琉球國に将来された高麗藏があつたことが検討される。同じく室町時代に琉球國も高麗藏を求めたが、その背景に京都から来た芥隱承琥（？—一四五五）の活躍があつたことが具体的に明らかにされる。京都の仏教界と関係が存在し、琉球の仏教が栄えたといふ。琉球には天界寺と円覚寺がその代表的な寺院として存在したが、そこに大藏經のないことが嘆かれ、それが高麗藏将来の動機となつた。尚徳王（在位 一四六〇—一六九）の時に朝鮮から直接にもたらされた。この時、大藏經とともに禪宗で日常に読まれる經典が、式送られたことが注目される。

『宗教研究』91卷1輯 (2017年)

また琉球の禪寺、安國寺に經典がないことから高麗藏を求めたことも確認される。さて、琉球の仏教交流には南禪寺出身の芥隱の活躍があつたと考えられ、京都五山と同じ名称の寺院が琉球に作られ、芥隱がそれぞれ住持を兼ね務めたといふ。琉球では、北山、中山、南山の三山を統して尚氏による王朝が出来たが、戦乱に対する不安、政治、經濟に対する不安が存在した。その不安を取り除くために仏教に帰依し、大藏經は、そのため活用されたのではないかと推定する。

第三章は「江戸時代の高麗版大藏經の活用」である。この章では日本で最初に刊行された、大藏經開版事業が検討される。比叡山の僧侶であつた宗存は高麗藏の『大藏目録』を刊行し、高麗藏に基づいた大藏經の刊行を企てたが完成を見なかつた。代わりに天海による刊行に切り替わる。これが天海版大藏經と呼ばれるのであるが、どちらも木活字による印刷であった。大藏經の刊行には多大な費用が掛かるが、それは政権の安定した時代になつて始めて可能になつたのではないかといふ。宗存は伊勢の内宮に大藏經を奉納することを目的に刊行を始めたことが「切経開版勧進状」から知られる。實際の刊行は幾つかの例外があるが、ほぼ高麗藏に基づいていた。

次に江戸時代における高麗藏の活用について言及される。高麗藏が善本であるとの評価を下したのは法然院の忍激であるといふ。彼は鉄眼によつてなされた黄檗版の誤りを高麗版によつて対校することで明らかにした。なお、室町時代から高麗版は将来されているが、學問的に研究された形跡を見出すことが出来ない。足利義政は六蔵もの高麗版を招請したこと有名である。

次に高麗藏の書誌学的な研究に留まらず、受容という文化的な側面にも焦点をあてて記述している点が注目できる。高麗藏は仏の力によつて契丹の侵入を防御しようとして雕造された大藏經であり、そのため呪術的な用いられ方をしたことは容易に想像される。たとえば、それは玄奘の翻訳になる『大般若經』が、その完成時の供養において「鎮國の典」とされたことにより、護國の目的のためによく使用されたとの類似する。日本に将来された高麗藏も、そのような意味を持つて受容されたことは容易に想像される。おそらくすべてが説誦、あるいは余りにも大部であるが故に、部分のみが、祈願成就のために説誦の対象になつたのだろう。

ところで、馬場氏の指摘で卓見であると思われたのは、高麗藏が異体字の多い大藏經であるにも拘わらず、その研究が江戸時代の忍激の頃まで存在しないという事実から、本格的な研究が始まつたのは近世であろうと述べることである。本書の中でも指摘しているが、現代の成果として高麗藏の異体字辞典（高麗大藏經異体字典）（一〇〇〇年）が刊行され、約七万字にも及ぶ異体字が存在していることが明らかになつていて。

しかし、ここには若干の疑問も生じる。というのは室町時代に全く異体字に関する指摘がないということは、音読されることうえ無かつたことを意味しないだろうか。つまり経典のある文字がある文字の異体字であることが分かつていなければ、發音さえできなかつたはずである。このように考えれば、室町時代の高麗藏は、護國の典籍集成として、あるいは將軍の誕生日

るが、彼自身は浄土教を信じていたという。江戸時代になつて始めて、高麗版に多い異体字の研究がなされるようになつた。異体字として七万字以上が使われているという。このことから高麗版が学術的に利用されるようになつたのは江戸時代からであるという。とくに家康の援助を受けて関東八檀林を整備した淨土宗における学問的な研鑽が注目される。とくにその筆頭であった増上寺の二藏は、宗学研究のために利用規程が作られ、研究のために活用されていたことが確認できる。また、真言宗の戒律復興では有部律が重視されたが、それらは黄檗版には入藏されていなかつたので、高麗版にあるものを底本に刊行された。

第四章は「高麗版大藏經の影印本と版本」と題し、韓国の大東国大学校と東洋仏典研究会から、九七〇年代に影印出版された高麗藏について検討する。そもそも一箇所から出版する必要があつたのかどうか基本的な疑問から出発するが、その底本が明らかではなく、双方が異なる構成を持つており、しかも欠字に関する問題があることを明らかにする。

海印寺所蔵の版本は二度の調査が行われており、第一回は朝鮮総督寺内正毅が明治天皇追慕のために印刷を計画したときに行われ、九五五年より三藏が印刷された。第一回は、九三七年に満州國皇帝の希望で印刷されたときの調査、第三回目は九六三年から九六八年にかけて印刷された時に徐首生が行った調査であるという。その調査結果から、九三七年から九六年までの間に版木の劣化が進み、欠字が進んだことが分かる。これらの調査結果と一種類の影印版を比較調査した結果、

第四章は「高麗版大藏經の影印本と版本」と題し、韓国の大東国大学校と東洋仏典研究会から、九七〇年代に影印出版された高麗藏について検討する。そもそも一箇所から出版する必要があつたのかどうか基本的な疑問から出発するが、その底本が明らかではなく、双方が異なる構成を持つており、しかも欠字に関する問題があることを明らかにする。

海印寺所蔵の版本は二度の調査が行われており、第一回は朝鮮総督寺内正毅が明治天皇追慕のために印刷を計画したときに行われ、九五五年より三藏が印刷された。第一回は、九三七年に満州國皇帝の希望で印刷されたときの調査、第三回目は九六三年から九六八年にかけて印刷された時に徐首生が行った調査であるという。その調査結果から、九三七年から九六年までの間に版木の劣化が進み、欠字が進んだことが分かる。これらの調査結果と一種類の影印版を比較調査した結果、

東国大学校本の底本が何であるかは特定できなかつたが、九六〇年代以降に印刷されたものを使用していることが推定された。欠字は金属活字で補われており、容易に見出すことができる。一方、東洋仏典研究会本は、欠字を書写で補つております。その寄贈の経緯が不明になっているものである。底本はノウル大学に収蔵されている高麗藏と近いことが指摘された。ノウル大学蔵の高麗藏は寺内正毅の寄贈になるものがその各冊の内題から知られるが、その寄贈の経緯が不明になっているものである。底本はノウル大学本、そして校訂に朝鮮半島の五台山、金剛山、日本の増上寺、東本願寺の高麗藏を使って欠字の校訂をしていることが、小田幹一郎の「高麗版大藏經印刷顛末」（泉涌寺、九一二）から分かるという。

以上の論攷のあとに、付録Iとして「高麗版大藏經関係研究文献目録」と付録IIとして「高麗版大藏經（東国大学校本・東洋仏典研究会本）・大正新脩大藏經・五十音順対照目録」が附属している。

以上、本書の簡単な内容紹介を行つたので、気がついたことを次に述べたい。

まず、本書の特徴は、日本国内の研究成果のみではなく、韓国で行われた研究までも網羅的に目を配つて、それらの論文の位置づけを行つてある点にある。日本に収蔵される高麗藏の個別の研究は目にする機会が多いが、ハングルで書かれた研究を視野にいれたものは少ない。その点で馬場氏は韓国に留学した経験を生かして、朝鮮半島、韓国においてなされた研究成果をよく把握し論述しているところは評価される。

近代日本仏教研究におけるアジアへの関与を論じた先行研究では、東アジアに対する海外布教にウエイトが置かれて、南方地域は十分視野にいれられていないこと、また数少ない研究で各宗派単位の活動に視野が止まっているという。そこで大澤氏は、この地域においてはむしろ現地の宗教事情尊重の方針から、宗派ごとの布教よりも、超宗派的な組織を基盤とした学術調査や文化工作が行わされたという点を踏まえて、仏教界全体の動向を視野に入れようと努めている。

他方、戦時下で日本の勢力下に置かれた東南アジアを対象とした先行研究においては、東南アジア島嶼部のインドネシアにおけるイスラームやフィリピンにおけるキリスト教（カトリック）に対する宗教政策は論じられてはいるものの、東南アジア大陸部の仏教を対象とした研究は皆無であるとしている。著者はそうした先行研究の空隙を埋める研究として本書を位置づけ

本書の要約

本書は、九一七年（昭和）の日中戦争勃発から、五年（昭和〇）の敗戦に至る「戰時下」における「南方」（今日の東南アジア）地域において、「日本仏教」が宗派単位を超えた次元でどのように「応用」されたかを宗教研究の視点から問うものである。ここで言われる「応用」とは、政府軍部が仏教者を動員して行つた諸活動のことであり、そこでは布教活動は主目的とはならず、調査活動と文化工作を通じた影響力拡大が図られた。こうした課題に対して本書は、政府軍部側から仏教界に対し行われた施策の実態分析と、それを受けた仏教界側の対応分析という二つの方向からアプローチする。

序論では以上のような問題設定がなされ、最後に本書の構成を説明している。以下では、二部からなる本論部について章ごとに簡潔に紹介してみたい。

第一部「戦時体制と仏教界 仏教学界」では、日本本土における仏教者の動向を捉えるつの章が置かれている。

第二章「財團法人大日本仏教会の組織と活動」は、昭和前期における仏教界の連合組織である財團法人大日本仏教会の沿革と役割を論じたものである。九年(明治四五／大正元)に任意団体としての仏教各宗派懇話会から出発して、その後の仏教連合会の設立と財團法人化、大日本仏教連合会への改称を経て、九四年に内閣興亜院の指導によつて興亜仏教協会を吸収合併する形で大日本仏教会へと再編されている。同会の興亜局が南方地域への活動を所管したが、その活動目的は中国における各宗派の競合を踏まえて布教ではなく、同盟国のタイを中心とする文化工作に置かれた。

九四四年には宗教界全体の連合組織として財團法人大日本戦時宗教報国会が設立され、その下に仏教局が置かれる。著者はこうした連の再編の流れを、文部省の宗教統制の結果であるとまとめている。その際、政府 文部省から各宗派への指導の徹底はこれらの仏教界の連合組織が命令系統の回路としての役割を果たしたこと、南方地域への日本佛教の関与において人材と資金の取りまとめを行つていたことを指摘している。

最後になつたが、幾つか言葉の意味をどう取つたらよいのか
分かりにくかつたものがあつたので記しておきたい。まずつ
は転読の意味である。転読は「音を引いて長く読む」の意味か
ら、同じ經典を「繰り返し読む」、あるいは「大般若の転読」
のように折帖装の教本を「ぱらぱらとめくつて読む」の意な
ど、多様に解釈しうる言葉である。筆者はどのような意味で使
つたのであろうか。それから、第一章で「遠く琉球に来て、法
求人となつた」という記述があつたが、「法求人」とはどのよ
うな意味なのか理解が容易でなかつた。とくに資料の現代語訳
において、若干、意味の通りにくい箇所があるようと思われ
た。平易な現代語訳を心がけている姿勢は好感の持てるもので
あるが、わかりやすい日本語が望ましい。また、若干、校正ミ
スが見られたが、本書の意義を損ねるものではないことを断つ
ておきたい。

以上、内容紹介を兼ねた書評を終えることとするが、セツ
トに膨大な数の經典が含まれる大藏經を研究の対象とする、労
作であることを改めて実感した次第である。

序論

- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| 西村 明 | 西村 明 |
| [目次] | |
| | 序論 |
| 第一回 戦時体制と仏教界 仏教学界 | 第二回 財團法人大日本仏教会の組織と活動 |
| 第一章 國際仏教協会の調査研究とその変容 | 第三章 財團法人仏教團協会の工作要員養成 |
| 第四章 マラヤの占領と宗教調査 | 第五章 南方進攻と仏教学者の関与 |
| 第五章 興亜仏教協会のインドシナ調査 | 第六章 ビルマ進攻作戦と仏教宣撫工作 |
| 第六章 マラヤの占領と宗教調査 | 第七章 ピルマ進攻作戦と仏教宣撫工作 |
| 第七章 仏教留学生のインドシナ派遣 | 第八章 マラヤの占領と宗教調査 |
| 第八章 日本仏教の対南文化進出 | 第九章 ピルマ進攻作戦と仏教宣撫工作 |
| 第九章 真如親王奉讃会とシンガポール | 第十章 マラヤの占領と宗教調査 |
| 第十章 ジャワの仏教遺跡ボロブドゥール | 第十一章 ピルマ進攻作戦と仏教宣撫工作 |
| 第十一章 バノコクの日泰文化会館と仏教界の支援 | 第十二章 マラヤの占領と宗教調査 |
| | A5判 ix + 二九〇頁 四八〇〇円+税 |